
ことばと化石

——『ブヴァールとペキュシェ』における地質学——

荒原由紀子

〈東洋大学〉

Résumé

Le présent exposé se penche sur la genèse de l'épisode géologique de *Bouvard et Pécuchet* (1881) de Flaubert, et en particulier sur une question qui interpelle immanquablement le lecteur de ce roman encyclopédique : la question de la réception du discours de la science par l'écriture littéraire. La microanalyse de quatre éléments — le lichen, le roseau, le labyrinthodonte et le châtaignier — qui figurent dans le texte et l'avant-texte du passage consacré à la représentation de la préhistoire du globe terrestre montre que l'écriture romanesque émerge ici de la confrontation continue de deux problématiques antagoniques aux yeux de l'écrivain, d'une part la conformité au savoir et d'autre part le travail de perfectionnement stylistique. La genèse de ce fragment textuel nous permet alors de saisir très concrètement les différents procédés d'écriture mis en œuvre pour approcher de ce style idéal qui devrait être, selon le romancier, à la fois « rythmé comme le vers » et « précis comme le langage des sciences ».

I 小説のエクリチュールと知の言説

本発表ではフローベールの遺作『ブヴァールとペキュシェ』（1881年）の第3章に含まれる地質学の挿話の生成過程を題材に、この百科全書的小説の読者が避けて通ることのできないひとつの重要な問題である、文学のエクリチュールによる科学の言説の受容について考察を行ってみたいと思う。

たとえば、この作品のふたりの主人公が地球の歴史について書かれた2冊の科学の書物、アレクサンドル・ベルトランの『地球の革命についての書簡』とジョルジュ・キュヴィエの『地球の革命の理論』を読む場面をとりあげてみよう。

[...] ふたりの地質学への関心をかき立てるために、デュムシエルはベルトランの『書簡』と、それからキュヴィエの『地球の革命の理論』を一緒に送ってきた。

2冊の書物を読み終えたふたりは、つぎのようなことを思い描いた。

まずさいしょに巨大な水の広がりがあった、そこから地衣類にまだらに彩られた岬が突き出てきた。生きものの影ひとつなければ、物音ひとつしない。静まりかえって、何も動かない、裸の世界だった。——そのつぎには、蒸風呂の蒸気に似た霧のなかで、ひよろ長い植物が揺れていた。まっ赤な太陽が湿った大気を過熱していた。すると火山が爆発し、山々から火成岩がほとぼしり出て、溶解状態の斑岩や玄武岩が凝固した。——第3のタブロー。あまり深くない海のなかから、イシサンゴの島々が現れた。ヤシの木立がところどころにそびえている。荷車の車輪そっくりな貝や、3メートルもあるカメや、60

尺のトカゲがいる。両生類がアシのあいだから、ワニの顎がくっついたダチョウみたいな首を伸ばしている。翼をもったヘビが飛びかう。——さいごに、大陸の上に大型の哺乳類が現れた。4本の脚は下手に削られた角材のようにぶかっこうで、皮膚は青銅の板よりも厚い。毛むくじゃらで、下唇が突き出て、鬣やねじれた牙がついているのもいた。マンモスの群れが、のちに大西洋となる平原で草をはんでいた。なかばウマでなかばバクのパレオテリウムが、モンマルトルのアリ塚を鼻づらでほじくり返していた。そして洞窟グマが吼えると、オオカミの3倍もの背丈のボージャンシーのイヌが巣穴のなかでキャンキャンと鳴き、またセルヴス・ジガンテウスがクリの木の下で震えあがるのであった。

これらのすべての時期は天変地異によってたがいに隔てられていたが、そのさいごの天変地異はわれわれの洪水である。それは何幕かの夢幻劇のようであり、フィナーレには人類が現れるのであった¹。

私は既刊の拙稿²においてこの断章の生成過程を復元し、原始時代の地球を描いた一連のタブローに現れるほぼすべての動物種と植物種が、キュヴィエの学説を一般読者向けに通俗化したペルトランの著作の第5版(1839年)³からの引用であることを明らかにすることができた。またこの同じ論考では、フローベールのエクリチュールが問題の源泉の随所から抜粋された動物種の羅列的なリストという単純な形式から出発し、決定稿に見られる植物相と動物相のいきいきとした4つのタブローを徐々に構築していくプロセスを解明することができた。この断章の生成過程に関与した31枚のフォリオは、以下のように分類される⁴。

ルーアンのセナリオ：

ms gg10, f°34 (Rouen III), 12 (Rouen IV), 21 (Rouen V), 13 (Rouen IV)

下書き原稿：

第1段階：ms g225(3), f°334, f°356v°, f°338v°(1), f°338v°(2), f°361, f°363, f°362, f°359, f°382, f°369

第2段階：ms g225(3), f°358, f°357, f°360a, f°372v°, f°379v°b, f°394v°, f°398v°, f°368v°

第3段階：ms g225(3), f°370v°, f°365v°, f°383v°

第4段階：ms g225(3), f°364, f°367, f°368(1), f°366, f°365

第5段階：ms g225(4), f°416v°, ms g225(3), f°383v° (加筆)

決定稿：ms g224, f°64

本発表では、ひとつの源泉からの引用に大幅に依拠したこの執筆作業から逸脱する数少ない要素にむしろ焦点をあててみたい。というのも、「何幕かの夢幻劇」に登場する諸事象のなかには、ペルトランの書簡体の啓蒙書、そして地質学を学ぶふたりの人物が場面冒頭で読んでいとされるキュヴィエの専門書のいずれをも典拠としていないものがいくつか存在するのである。断章の生成過程のなかで占めているその特異な位置ゆえに、これらの事例——合計4つ——は、知の言説という異質な対象を摂取しようとする小説のエクリチュールがいかなる手法を介して産出され、またいかなる動機に支配されているのかを如実に照らしだしてくれるはずである。

1 Gustave Flaubert, *Bouvard et Pécuchet*, éd. Stéphanie Dord-Crouslé, Paris, Flammarion, « GF », 1999, pp. 131-132.

2 荒原由紀子「フローベール『ブヴァールとペキュシェ』におけるエクリチュールと科学——地球の歴史をいかに語るか——」、『日本フランス語フランス文学会関東支部論集』第14号、2005年、pp. 109-121.

3 Alexandre-Jacques-François Bertrand (1795-1831), *Lettres sur les révolutions du globe*, 5e éd., Paris, J. Tessier, 1839.

4 各フォリオには、所蔵先であるルーアン市立図書館の登録番号が付されている。また、本発表で言及しない引用するフォリオの番号は太字にした。

II ブイエの『化石』

まずさいしょにふたつの化石植物、地衣類 (lichen) とアシ (roseau) を検討してみよう。タブローの内容がはじめて具体的に考案される f°370v° の左余白には10種類の植物の名前が記されているが、そのうち第1のタブローに属する地衣類だけが、ベルトランの『書簡』を出典としていない。このタブローはつぎのように簡潔に素描されている：「花崗岩の層。地衣類」。古植物学を論じ、またこのフォリオに記載されているほかのすべての植物種の源泉であるベルトランの「書簡17」はこの原始的な植物に一度も言及していないが、花崗岩と地衣類を並置するこの草稿の記述は、やはり地球の生成を主題とするほかのある一篇のテキストへ分析者を送付する。そのテキストとは、1854年4月15日に『パリ評論』誌に掲載されたのちに1859年に詩集『花綵と玉縁』に収録されたルイ・ブイエの長大な韻文詩、『化石』である。この作品の最初の節には、以下のような詩句が見うけられる。

花崗岩が身をよじって不恰好な体勢をとり、
裸の空間に巨大な塊を直立させる、
またそのむきだしの腹のところどころでは、
まばらな苔が黄ばみ、錆色の地衣類⁵。

ふたりの友人のあいだで交わされた書簡が物語っているように、フローベールはこの詩の創作に大いに関心を示し、刊行前には作者に多くの助言を与えている⁶。776行におよぶこの作品のなかで、ブイエは生命の誕生から文明の発展にいたるまでの地球の歴史を6つの部分に分けて辿っている。ここで引用した箇所は歴史の黎明期における地球の様相を表象しており、この原初の光景はフローベールが草稿の段階で喚起した第1のタブローのイメージと厳密に一致する。花崗岩の塊があり、それは地衣類に覆われている。この類似性は小説の度重なる推敲を経て徐々に弱まっていき、花崗岩という鉱物学用語は最終的には消去される。「まずさいしょに巨大な水の広がりがあって、そこから地衣類にまだらに彩られた岬が突き出てきた。」、というのが決定稿のヴァージョンである。

ここで指摘した生成論的および伝記的な諸事項は、分析者をつぎのような仮説へ導いていく。地質学の挿話を執筆するさい、フローベールはブイエの詩を読み返したかもしれない、あるいは少なくとも思い出したのではないだろうか。そしてそのような場合、『化石』もまたこの断章の源泉であると見なすことができるのではないだろうか。確かにこの仮説は、ベルトランの『書簡』の事例とは違って、草稿に書き残された書誌学的な情報に裏打ちされているわけではない。しかしながら、草稿の段階における強い類似性、また小説家と問題の詩の生成を結ぶ緊密な関係は、このような解釈を正当化するに足る有力な根拠だと考えることができるはずである⁷。

さきに予告したふたつの化石植物のうちの后者、すなわちアシの事例がこの見解をさらに補強してくれる。この要素は f°370v° のさいしょのヴァージョンに続く f°365v° で導入され、やはりここではじめて登場する

5 Louis Bouilhet (1821–1869), « Les Fossiles », *Œuvres de Louis Bouilhet. Festons et astragales, Melænis, Dernières chansons*, Paris, Alphonse Lemerre, 1891, p. 115 (第1部の第1節)。

6 フローベールは2通の手紙 (1853年8月25日および1854年3月19日の手紙) のなかでブイエに作品の具体的な修正案を提示している (Gustave Flaubert, *Correspondance II*, éd. Jean Bruneau, Paris, Gallimard, « Bibliothèque de la Pléiade », 1980, pp. 413–414, 534–535)。また、『化石』の執筆についてブイエからフローベールに宛てられた手紙 (1854年2月から3月にかけての5通の手紙) に関しては、Louis Bouilhet, *Lettres à Gustave Flaubert*, éd. Maria Luisa Cappello, Paris, CNRS Éditions, 1996, pp. 44–48を参照のこと。

7 ルネ・デシャルムはブイエの詩がこの断章の源泉である可能性をすでに示唆しているが (René Descharmes, *Autour de « Bouvard et Pécuchet »*, Paris, Librairie de France, 1921, p. 160)、この論考は草稿の調査に立脚していない。

あるひとつの動物種に随伴する形で第3のタブローに記載されている：「アシのあいだから長い首を伸ばすプレシオサウルス」⁸。地衣類の場合と同じように、ベルトランの『書簡』はアシを扱っていないが、草稿に書かれたこの情景はブイエのいくつかの詩句をふたたび分析者に想起させる。実際、『化石』はフローベールのテキスト同様、巨大な動物がアシのあいだから姿を現す様子を描いた箇所をふたつ含んでいるのである。「アシを通り抜けていく風にも似て、／荒い吐息は鼻孔を押しひらき、／喉からはひゅうひゅう鋭い音が放たれる」、あるいは「だがアシのただなかから巨体を起こす／その遠い姿が月光に浮かぶ、／毛深いけものが絶えず息を吐き、／重いよつあしで立ち厳かに反芻する」⁹。ふたつの作品のあいだに認められる類似性は、ブイエの『化石』が小説家の文学的記憶を介して『ブヴァールとペキュシェ』のこの断章の生成に恐らく関与していることを、いま一度示唆してくれる。

この新しい源泉の発見は、『化石』が厳密な意味での科学の書物ではなく、科学的な主題に着想を得た文学テキストである点において興味深い。フローベールは地質学の挿話を著すさいに、科学の専門家によって書かれた文献のみならず、詩人が著した作品をも参照しているのである。予想を裏切るこの事態を前にした分析者は、つぎのような疑問を抱くことになるであろう。位相の異なる言説を共存させるこの執筆作業は、科学的な見地から見てその正確さが保証されない情報を小説のなかにとりこんでしまう危険性を孕んでいるのではないだろうか。

III 迷歯類、あるいは学名の消失

ベルトランの『書簡』を典拠としていない残りのふたつの要素が、この問題への回答を提供してくれる。はじめに、本発表でとりあげることになるゆいいつの化石動物、つまり迷歯類 (labyrinthodonte) の分析に着手しよう。ここで読解を行っている断章の草稿および決定稿に登場する数多くの古代動物のなかで、実はこの迷歯類だけがベルトランの文献で言及されていない。また迷歯類はベルトランが通俗化しているキュヴィエの論考にも、そしてさきほど特定することができたもうひとつの源泉、すなわちブイエの詩にも見られない。しかしながら、この生物は生成過程のきわめて早い段階で現れ、f°362の動物種のさいしょの羅列的なリストにすでに含まれている。そこには、以下のような記述がある：「迷歯類。雄牛の大きさの[トカゲ]ヒキガエル」。続いて、この簡単なリストがf°370v°でタブローの構造に置き換えられると学名は消失し、日常言語による言い換えの部分——「雄牛の大きさのヒキガエル」——のみが残される。その後、この生物は第3のタブローの構成要素として後続の複数のヴァージョンに登場するが、清書原稿のひとつ前の下書きであるf°365で、何の前触れもなく削除される。完成間近のこの段階にいたって、フローベールはなぜこの生物を排除する決断を下したのだろうか。より詳細に検討してみよう。

『19世紀ラールス大辞典』によれば、迷歯類は——labyrinthodon ないし labyrinthodonte と表記されるが——、「三畳紀の地層のなかで見出される化石骨にもとづき、オーウェン¹⁰が明らかにした」大型化石動物の一種である。「迷路 labyrinth およびギリシャ語の歯 odous, odontos」から派生した奇妙な名称は、この動物の歯の複雑な構造にちなんでいる。「歯のセメント質上層に見られる多数の非常に屈折した溝が歯髄のくぼみに向けて集まり」、それが「入り組んだ線の迷路」を作り出しているのである¹¹。この喚起力に富んだ語源にフローベールが惹きつけられ、それゆえにこの生物を地質学の挿話にとりいれようと考えたとしても

8 草稿の転写にあたっては、フローベールによって削除された箇所は [] で括り、加筆された箇所はイタリック体で記した。

9 Louis Bouilhet, *op. cit.*, p. 121 (第2部の第5節) および pp. 126–127 (第4部の第1節)。

10 英国の古生物学者リチャード・オーウェン (Richard Owen, 1804–1892) のことである。

11 *Grand Dictionnaire universel du XIX^e siècle*, Tome X, L, Paris, Librairie Larousse, 1873, p. 20.

不思議ではない¹²。また問題の記述の後半部分、つまり「雄牛の大きさの〔トカゲ〕ヒキガエル」という表現についても、同様の解釈を施すことができる。残念ながらその書名を特定することはできなかったが、小説の準備のために読まれた文献の一冊から書き写されたと目されるこの形容は、フローベールの作品世界にいつそう親しい暗示力を秘めているがために作家の関心をとらえたに違いない。というのも、すでに多くの論者が指摘しているように、ウシ科の動物たちはフローベールの文学的想像力においてきわめて特権的な位置を占めているのである¹³。

しかしながらさきほど確認したように、ふたつの部分からなるこの記述はじきに短縮され、学名が削除された上で日常言語による描写のみが採用される。迷路というそれ自体十分に魅惑的な含意をもっているはずの学名は退けられ、ウシ科の動物を動員するイメージが優位を獲得するのである。そして結果として、「雄牛の大きさの〔トカゲ〕ヒキガエル」という表現が正確には迷歯類という動物を指し示していることを読者は知るよしもないため、テキストの科学的な精密さは大きく損なわれ、ウシのイメージという文学的な要素が全面的に優先される。実際フローベールにとっては、エクリチュールが科学の領域に発する主題をとりあげるときであっても、作家の使命は決して読者に最大限の科学的情報を伝達することではない。この立場はルイズ・コレに宛てられた1854年3月19日の手紙、まさにフローベールがブイエの『化石』の執筆に関与していた時期に書かれた手紙で表明されている。

ピシャとマクシムに『化石』を読んで聞かせたときのことを書いてくれましたが、いささかも驚いてはいません。(ブイエは僕にその話しをしてはくれませんでした。僕には簡単な手紙しかくれないのです。) この先生がたはみんなひどく騒々しい環境で暮らしているので、耳を傾けて思いをこらすことは不可能なのです。それが第一の問題。つぎに、たとえ彼らが耳を貸したところで、これはみんなに分かるように書かれたのではないあの独創的な作品のひとつなのです。「動物の名前が書いていないのが残念だ！」というデュ・カンの意見は、彼が文体の観念というものをすっかりなくしてしまっていることを証明しています¹⁴。

ここで名前があげられているローラン・ピシャとマクシム・デュ・カンは、『化石』をこの1ヶ月後に掲載することになる『パリ評論』の編集長を務めていた。彼らの前で行われた作品の朗読会に立ち会ったというルイズ・コレによると、デュ・カンはブイエのテキストに「動物の名前が書いていない」ことに対して批判的な意見を述べた。そしてこのような発言は、「文体 style」を優先させることに眼目を置いたフローベール自身の文学観とは真っ向から対立する。ここで分析を行っている地質学の挿話の断章についても、デュ・カンは同一の酷評を口にすることができたであろう。なぜならば迷歯類の例と同じようにして、実は地球の歴史のタブローに登場するすべての動物種が草稿の段階でいったん学名で名指されてはいるものの、推敲の過程でその大半が消去され、決定稿には日常言語による言い換えだけが残されているのである。決定稿に現れる11の動物種のうち、学名が明記されているのは3種(マンモス、パレオテリウム、セルヴス・ジガンテウス)のみである。すべての事例について確認を行ったわけではないが、さきに引用したルイズ・コレへの書簡の言表に鑑みても、ふたつの方策——つまり動物を名指すか名指さないか——のあいだの選択は、フローベールのいう「文体の観念 *notion de style*」を基準にして行われたであろうことが推測される。そし

12 『ブヴァールとペキュシェ』においては、フローベールのエクリチュールは科学の言説がもつ語源的ないし修辞学的な局面にしばしば着目し、これらの要素を有効に活用している。フローベールにとっては科学とは何よりもまず、ひとつの言語的な対象なのである。この点については、たとえば Yvan Leclerc, *La Spirale et le monument. Essai sur "Bouvard et Pécuchet" de Gustave Flaubert*, Paris, SEDES, « Présences critiques », 1988, pp. 95-99を参照のこと。

13 *Ibid.*, p. 38.

14 Gustave Flaubert, *Correspondance II*, éd. cit., p. 538.

てここで詳細に検討している迷歯類の場合には、フローベール固有の文学的想像力に適合したイメージを喚起する表現であるがために、「雄牛の大きさのヒキガエル」が採用されたことになる。

それにもかかわらず、一体なぜこの「雄牛の大きさのヒキガエル」は、すでに執筆が大幅に進んだ清書原稿の一步手前で結局排除されてしまったのだろうか。地質学の歴史を紐解くと、つぎのような解釈の可能性が浮かびあがってくる。さきほど指摘したように、迷歯類はベルトランの文献では扱われていないが、この不在はごく単純な理由によって説明される。フローベールが参照した『書簡』のさいごの版である第5版が1839年に刊行されたとき、この動物は古生物学者によってまだ発見されていなかったのである。リチャード・オーウェンによって迷歯類が化石動物の分類体系に加えられたのはその3年後、1842年のことである¹⁵。また、「迷歯類」という項目が収録された『19世紀ラルース大辞典』の第10巻が刊行された時点、すなわち1873年において、この生物の身分に関する専門家たちの見解はいまだ一致していなかったことも特筆にたいする。両性類だと見なす学者もいれば、爬虫類だと考える者もいた¹⁶。小説の草稿に認められる「[トカゲ] ヒキガエル」という逡巡は、フローベールがまさに地質学の挿話を執筆していた時期に展開されていたこの古生物学の論争に呼応しているのではないだろうか。以上のような歴史的なコンテクストを知った上で提示できるのは、小説の人物が迷歯類の発見以前に出版された書物を読む場面でこの生物を喚起するという時代錯誤を犯すのを避けるために、削除が行われたのではないかという解釈である。フローベールは、科学史上の事実と反する要素をテキストに導入するのを回避するために、魅惑的な「雄牛の大きさのヒキガエル」を消去することを最後の下書きの段階で選択したのかもしれない。

迷歯類の事例は、『ブヴァールとペキュシェ』の生成過程においては、文学と科学というふたつの異質な問題系から発する要請がつねに対立を生み出していることを明らかにしてくれる。この動物種をめぐる一連の変遷についていえば、フローベールのエクリチュールは、学名に体现される科学的な精密さを犠牲にして「文体」上の要請を満たすことはあっても、たとえば歴史上の年代という科学的な事実を歪曲してまでそれを推し進めようとはしていないことを示唆しているように見うけられる。けれども草稿の解説をさらに続けていくと、この基準は特定の場合には例外も許容していたようであることを示す新たな事例に、分析者は遭遇する。本発表でさいごに扱うことになる地球の歴史のタブローの4つめの構成要素、クリの木である。

IV 文体の観念

さきほど分析したアシと同じように、クリの木 (châtaignier) はタブローの構造がはじめて導入される f°370v° よりもあとの段階でテキストに登場する。ただし、この要素の出現はアシよりもかなり遅く、清書原稿のふたつ前の下書きである f°366 を待たなくてはならない。クリの木が所属する第4のタブローの生成過程をまずはおおまかに辿ってみることにしよう。

f°370v° に書かれたタブローのさいしょのヴァージョンでは、この時代の植物相は、ベルトランの「書簡17」から引用されたマツ、モミ、クルミの木およびカエデによって形成されている。原稿の左余白に記されたこれらの4つの植物はつぎの f°365v° では本文中に挿入され、「大きなシカ。洞窟グマ。——マツ、モミ、カエデ、クルミの木」、という記述が出来あがる。続く f°364 ではマツは削除されるものの、この名詞文は継承され、その一方でフォリオの下部には「大きなシカが草をはんでいた」、という一文が加筆される。そしてつぎの f°366 ではこの動物が今度はラテン語の学名で名指されるとともに、ついにクリの木が登場する：

15 *Dictionary of scientific biography*, Volume 9, éd. Charles Coulston Gillispie, New York, Charles Scribner's sons, 1981, pp. 260–263.

16 *Grand Dictionnaire universel du XIX^e siècle*, Tome X, L, éd. cit., p. 20. 迷歯類は最終的には両性類として認知された。

セルヴス・メガセロスが [カエデをクルミの木をはんでいた]
 ジガンテウス クリの木の下に逃げこむのであった¹⁷

清書原稿直前の f°365では、結局「セルヴス・ジガンテウスがクリの木の下 [に逃げこむのであった] で震えあがるのであった」という表現が採用され、この一文は決定稿でも踏襲される。

以上のような推敲過程からは、クリの木が f°366でカエデとクルミの木の代替物として導入されているということ、そしてまたこの導入が問題の一文を構成している語句のそれぞれにかかわる書き直しの一環として行われているということが読み取れる。修正が加えられるよりも前の状態の言表は、「セルヴス・メガセロスがカエデをクルミの木をはんでいた」、である。変更がどのような順番で施されたのかを厳密に知ることが不可能であるとしても、草稿に見られるふたつの行の配置からは、書き直しの作業がふたつの段階を経て挙行されたことがうかがえる。一方では主語の修正が行われ、「メガセロス」が「ジガンテウス」に置き換えられる。そして他方では述部、すなわち動詞と補語の変更が行われ、「カエデをクルミの木をはんでいた」が「クリの木の下に逃げこむのであった」になる。ことによるとフローベールはここで新たなラテン語の名称と植物種を導入することによって、テキストの科学的な精密さを向上させようとしているのだろうか。

文に含まれる各語句をさらに綿密に分析してみよう。確かに、前のヴァージョンにあった「大きなシカ」を「セルヴス・メガセロス」に変えるという行為は、フローベールが科学的な精密さを優先させ、ここでは動物を例外的に学術用語で呼ぶことを選んでいるというふうにも見なすことができるかもしれない。しかしながら、そのあとに施される変更がこの解釈をただちに覆してしまう。セルヴス・メガセロスとセルヴス・ジガンテウスは地球の歴史の同じ時期に棲息し、また突出した角という共通の身体的特徴をもつシカ科の化石動物である。したがって、前者を後者に置き換えることによって科学的な見地から見て大きな利点が得られるとは考えにくい。つぎにクリの木に注目してみよう。この植物種がベルトランの著作でも、そして地衣類やアシの事例とは異なり、プイエの詩でも言及されていないことをまずは喚起しておこう。また、加筆された問題の一行の筆跡からは、述部の修正にさいしてはさいしよに動詞が、そしてそのあとに補語が書き直されたことが察知される。つまりクリの木は独立した存在として出現するのではなく、動詞の置換、すなわち「はむ」という動詞を「逃げこむ」という動詞に置き換えるという作業の帰結として書きこまれている。そして当然のことながら、このような動詞の修正はテキストの科学的な精密さを左右することはなく、文体の彫琢を目的とした操作以外の何ものでもない。

このさいごの指摘は、テキストの解釈にとって決定的な意味をもつ。というのも、問題の一文に加えられた諸々の修正が共通の目的、文体の完成という共通の目的によって統御されていると考えるのであれば、この言表の各要素について個別に行ってきた考察が、あるひとつの整合性を帯びてくる。主語（大きなシカ／セルヴス・メガセロス／セルヴス・ジガンテウス）、動詞（はんでいた／逃げこむのであった）、そして補語（カエデをクルミの木を／クリの木の下に）——文章の各要素をめぐる変更は、テキストを文体的な見地から完成させることを目指しているという結論に分析者はここでたどり着くのである。

クリの木がベルトランとプイエのいずれをも出典としていないのは、この植物種が恐らくはフローベールのエクリチュールによる純然たる創造物だからである。ここでは科学的な事実を知ること、つまりクリの木が地球の歴史のこの時期の植物相のなかに実在していたのかどうかを知ることが、作家にとってはもはや重要ではない。さきに述べたように、f°366はテキストが完成に近い、清書原稿のふたつ前の下書きである。

17 原文はつぎのとおりである：« le cervus megaceros [broutait les erables les noyers]
 gigantes s'enfuyait sous les chataigniers »

そして生成過程のこのような段階においては、フローベールの執筆作業の主要な目的は作品の筋書きの構築や資料の摂取ではなく、むしろ文章の推敲であることはすでによく知られている¹⁸。『ブヴァールとペキュシェ』の執筆についても、下書きの段階では「文体にかかわる多くの作業」が遂行され、それらがとりわけ「リズムや韻律」の観点から文章の質を向上させることを目指しているという現象がしばしば指摘されてきた¹⁹。語句の選択、語句の位置、音声、音節の数などの細かい要素をめぐって緻密な推敲作業が展開されるのだ²⁰。本発表の趣旨からは逸れるため詳細な文体論的な分析は割愛するが、フローベールの作品の生成に関する諸研究が明らかにしてきた知見、そして本発表でとりあげている草稿のなかで実際に観察できた諸事項からは、クリの木が科学の言説によって保証された指示対象を求めるものではなく、リズムや韻律といった見地から文章に適合したシニフィアンとして地質学の挿話に導入されたのではないかという判断を下すことができる。多くの論者が引用してきた1852年の書簡に記されているように、ここで重要なのは草稿の一行が「良質な散文の文章」、「良質な韻文のように変更不可能で、韻文のようなリズムと音声をもった」²¹一文に到達することなのだ。そしてそのようなとき、文体上の要請が科学的な事実への参照を最終的に凌駕する。

結 論

本発表では地衣類、アシ、迷歯類、そしてクリの木という4つの要素の分析をとおして、地球の歴史のタブローの生成過程においては、文学と科学というふたつの異質な問題系がその存在をつねに同時に主張していることを確認することができた。まずさいしょにブイエの詩の事例が、作品の源泉の次元において文学テキストが科学の言説と共存しているという事態を照らしだしてくれた。またさいごのふたつの動物種と植物種の分析は、作品の生産が小説家の視点から見ると相反するふたつの要請、科学の知との合致と文体の彫琢というふたつの要請のあいだの対立を経由していることを明らかにしてくれた。

つまり小説のテキストによる科学の言説の受容は、ここでは科学的な事実と文学的な創造のあいだの絶えざるせめぎあいとして定義される。フローベールのエクリチュールはこのふたつの要請の競合を通じて産出され、最終的には源泉の採用にせよ、語句の選択にせよ、文学的な要請が優位を獲得する。失われた種の化石をことばによって甦らせることを企図する『ブヴァールとペキュシェ』のこの断章においては、フローベールのエクリチュールは文学と科学のはざままで生み出される。そしてさきに引用した書簡の数ヶ月前に書かれた手紙で、小説家は自らのエクリチュールがその内部にふたつの野望を秘めていることを明かしている。「でも僕、この僕はあるひとつの文体を考案しています。素晴らしい文体 […]、韻文のようにリズムをもち、科学の言語のように精密であるような文体を」²²。世界の誕生を物語るこの断章の生成過程は、そのようなエクリチュールが徐々に姿を現してくる場所、「10年後にしる10世紀後にしる、誰かがいつかはきつと作り出すはずの」²³理想の文体に接近するためのさまざまな試行錯誤がくり広げられる場所に、分析者を立ち会わせてくれるのである。

18 Pierre-Marc de Biasi, *La Génétique des textes*, Paris, Nathan, « 128 », 2000, pp. 42–43 ; Stéphanie Dord-Crouslé, « Entre programme et processus : le dynamisme de l'écriture flaubertienne. Quelques points de méthode », *Genesis* 13, 1999, p. 69.

19 Anne Herschberg-Pierrot, « Étude génétique de l'incipit de *Bouvard et Pécuchet* », *Équinoxe. Revue internationale d'études françaises*, n°16, Kyoto, Rinsen-book Co., printemps 1999, pp. 88–93.

20 Anne Herschberg-Pierrot, « Flaubert : la prose à l'œuvre », *Crise de prose*, sous la direction de Jean-Nicolas Illouz et Jacques Neefs, Saint-Denis, Presses universitaires de Vincennes, « Essais et savoirs », 2002, pp. 33–37.

21 Gustave Flaubert, *Correspondance II*, éd. cit., p. 135 (1852年7月22日のルイーゼ・コレへの手紙)。

22 *Ibid.*, p. 79 (1852年4月24日のルイーゼ・コレへの手紙)。

23 *Ibid.*

質疑応答

フィリップ・デュフル 大変深い学識のあるご発表で、フローベールのエステティックについて明らかにしていただいたと思います。ルイ・ブイエの詩の引用が特に印象的でした。ブイエを参照することは、科学的要素と同時に既に文学的エクリチュールを見出すことであり、この両者がともに存在していることがわかりました。また、特に大事なのはブイエの詩が現在形で書かれていることで、引用に見られるように、葦を迫真法で描き出

しているパッセージは現在形です。これはブイエの現在形であると同時に、半過去から現在に突如として移行するフローベールの現在形ではないでしょうか。

荒原由紀子 ご指摘の通りで、そこには気づきませんでした。

デュフル これは些細な指摘に過ぎませんが、ご発表で論じられていた文体の優位という説にまさに合致するものです。

荒原 ありがとうございます。